

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎 REIMEI 明 報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0023号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成18年3月29日

皇室の伝統を守る一万人大会

=大会決議文=

125代、2千年以上続いてきた日本の皇室は世界に比類ない歴史と伝統をもっています。世界に多くの王室がある中、我が皇室は、その淵源が神話にまでさかのぼる最古の王室でありしかもその皇位が今日まで断絶することなく男系により継承されてきました。その歴史的事実は、まさに世界の奇跡であり、私共日本人の誇りでもありましょう。

この度、40年来、皇位を継承されるべき男性皇族のご誕生がないため、安定的な皇位の継承を可能にするための制度を確立するとして「皇室典範を考える有識者会議」は、女性・女系天皇の導入と皇位継承者の長子優先を柱とする改正案を報告しました。ところがこの改正案は男系による皇位継承の伝統を大きく改変する制度の導入であり、各界識者や国会議員より拙速な改定に慎重な意見が相継いでおります。こうした中、今秋、秋篠宮家に第三子のご誕生されるというご慶事が訪れ、政府・与党内にも慎重な議論が必要との判断が出されていることは、誠に多とすべきであります。

歴史を翻れば、125代の間、幾度か男系による皇位継承は断絶の危機に直面した事がありました。しかし私共の祖先は、多くの叡智と努力を傾けこれを乗り越え、万世一系の伝統を守りぬき、天皇陛下を中心として、国の発展が図られてまいりました。私共は過去の祖先の努力に学び、私共が直面している皇位継承の危機を乗り越えなければなりません。そして、皇室のご存在の意義を広く啓発し、国民一人一人が関心を寄せ国民的議論を起こす事によって、百年先、千年先のより良い日本の将来を築く契機といたしたく願っております。

ここに各界各層の皆様方のご賛同を得て「皇室の伝統を守る国民の会」を設立し、多くの国民の叡智を集めて、伝統に基づく皇位継承制度を確立し、もって世界に誇るべき万世一系の伝統を守ってまいりたく存じます。



会場を埋め尽くした愛国者

思いつきと丸投げで政を司る小泉純一郎という名の愚かな独裁者がいる。この独裁者は「神聖ニシテ侵スベカラズ」のサンクチュアルに土足で上がりこみ、その聖域を踏み躪り、破壊せしめんと画策した。神武天皇から125代・2666年の長きに亘り連綿と受け継がれてきた万世一系の皇室を、独裁者の魔手から守り、磐石ならしめることこそ、我々国民に課せられた責務ではないだろうか。平成18年3月7日、日本武道館で「皇室の伝統を守る一万人大会」が開催された。会場全体を見渡せる3階の最上段に陣取り、開会を待っていると、湧き上がる胸の高まりが次第に大きくなっていった。肌に粟を生ずるようなこの思いは何なのだろうか、理解できぬまま開会を迎えた。「皇室の伝統を守ろう」と全国津々浦々から参集した1万人超の国を憂い、国を愛する老若男女が「君が代」を斉唱し、村松英子の女優らしいメリハリのきいた司会で「皇室の伝統を守る一万人大会」は始まった。

初めに主催者を代表し、三好達・元最高裁判所長官が挨拶に立った。元長官は会場を埋め尽くした参加者を見て「まだまだ日本は大丈夫なんだなと実感しました。目頭が熱くなる思いです。」と胸の内を吐露した。三好・元長官に続いたのは中西輝政・京都大学教授である。中西教授は「有識者会議の欠陥」と「万世一系の正当性」を分かりやすく解説してくれた。会場を埋め尽くした参加者のボルテージが最高潮に達したのはこの直後だった。司会者から紹介を受けたジャーナリストの櫻井よし子は万雷の拍手で迎えられた。女性らしく穏やかな語り口だが、話しの内容は実に辛辣でアイロニックなものであった。櫻井女史は有識者と呼ばれる人々の会合について「選ばれた10の方が、10ヶ月にわたって議論なされたということでした。けれども各委員の出欠が明確になっている15回の会

議のうち、3分の1以上の6回を欠席なされた方もおられます。3回ずつ欠席された方もおられます。もしくは出席しても冒頭の20分で中座された方もおられます。2600年以上も続いてきた、この伝統のこれからのあり方を論ずる時に、この様な不真面目な態度で論議して宜しいものでありましょうか？」と痛烈に批判した。また櫻井女史は秋篠宮妃殿下紀子様ご懐妊に触れ、「紀様様がご懐妊になりました。この事は私たち国民全員に『もっとしっかりお考えなさい、あなた方は何者ですか？無国籍の民ではありませんでしょ？日本民族の末裔でしょ？この日本国の歴史と伝統と文明を忘れて、根無し草のようになってどうなさるおつもりですか？』と聞いておられるのだと思います。」と会場を埋め尽くした一人一人の心の深層に語りかけた。私の近くに座っていた初老の婦人は、両手を胸の前で握り締め熱心に聞き入っていた。その目にはうっすらと光るものがあつた。会場全体が一つになっていた。私はこの時初めて開会前に感じた胸の高まりを理解することができた。女史の言葉は「益荒男」だけが敵を撃つわけではない、「手弱女」も敵を撃つことが出来るということを証明してみせた。日本浪漫派の詩人・蓮田善明の言葉を引用すれば「雅が敵を撃つ」瞬間であつた。その瞬間を目の当たりにできるとは思いもよらなかった事であり、それだけでもこの大会に参加した意義があつた。

その後、島村宣伸(自民)、中井治(民主)、平沼赳夫(無所属)の三人の国会議員が登壇した。続いて来賓の国会議員86名(本人参加)が紹介された。一人一人紹介されていく中で、ひと際大きな拍手を浴びたのは西村真悟衆院議員であつた。自身の紹介が終わると、国会議員の先生方は、そそくさと会場を後にし、前述の西村議員と数名を残すだけとなつた。かかる国家の一大事に、斯様な議員の振る舞いは、この大会に唯一の汚点を残した売名行為であると指弾する。次にアフターブセット慶応大学教授(インド)、金美齡・台湾総統府国策顧問、外交評論家の加瀬英明、ノンフィクション作家の関岡英之が登壇した。途中、ヘブライ大学教授・ベン・アミ・シロニーのメッセージが司会者・村松英子の代読により紹介された。登壇者全員が皇室に対する熱き思いを述べ、皇室典範の改悪を一身を挺して阻止しようとする意志を表明した。中でも金女史の言葉は情熱的で身が震えるほどの感動を覚えた。金女史は「私は台湾人であると同時に心から日本を愛しています。秋篠宮妃殿下紀子様ご懐妊で神風が吹いたと思っています。戦時中私は『紀元2600年の歌』を台湾で歌っていました。『日本の兵隊さん、ありがとう』と言って慰問袋を作っていました。皇室の存在を身にしみ感じています。皇室は日本の、世界の宝物であります」と述べ1万300人の日本人の魂を揺さぶつた。櫻井女史と同様に金女史の言葉も「雅が敵を撃つ」ものがあつた。



1万300人の聖寿萬歳

続いて百地章・日本大学教授が大会決議文を朗読し、自民党の下村博文と民主党の松原仁の両衆院議員に手渡された。最後に前拓殖大学総長・小田村四郎の発声により聖寿萬歳を三唱し、大会の幕は閉じられた。日本武道館を埋め尽くした1万300人の熱気は凄まじいものがあり、改めて皇室に対する日本国民の思いの強さを感じ、三好達・元最高裁長官と同様に「まだまだ日本は大丈夫なんだ」と実感した。しかし、まだこの危機を乗り越えたわけではない。これから先さらに世論を発揚し、神代の昔から連綿と受け継がれてきた伝統に基づく皇位継承制度を確立していかなければならないと痛感した一日だつた。 編集人/戸出蒼流

祝 日本チー ム 世界一

今度はサンディエゴからの朗報であつた。1ヶ月前の荒川静香の金メダルに続いて、日本男児が大和魂の真骨頂を世界に知らしめた。米国で開催された「第1回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)」は日本時間の21日決勝を迎え、日本がキューバを10:6で退け世界の頂点に立った。日本は1次リーグに続いて2次リーグでも格下の韓国に敗れ「野球人生最大の屈辱」から不死鳥のように蘇り、準決勝では韓国を6:0と完膚なきまでに叩きのめした。2次リーグで1勝2敗となつた日本は、剣が峰に立たされたが、19日米国本土に神風が吹いた。準決勝進出を争う4チームの中で最弱と見られていたメキシコが最強と目されていた米国を破り、日本の準決勝進出が決まつた。2日後のキューバとの決勝戦では、打線の爆発と投手陣の踏ん張りでもってキューバを撃破し、初代王者としてWBCの歴史にその名を刻んだ。奇しくも靖国の桜が花開いた日のことであつた。 編集人

【露呈した問題点】終わってみれば日本の優勝という大変喜ばしい結果となつたが、色々な問題があつたのも事実だ。まず審判の質の問題だが、勝敗に関わる大事な場面での明らかな誤審は、サッカーのW杯なら国際問題になっていただろう。次に指摘したいのは組み合わせの問題である。特にひどいのは準決勝の組



満面笑みの王監督とイチロー

み合わせで、本来ならば1組の1位と2組の2位、1組の2位と2組の1位が対戦すべきなのに奇妙な話である。当初、米国による米国のための大会と揶揄されていたが、米国人の審判による数々の誤審や米国有利の日程と組み合わせをみる限り、批判は免れない。

米国と共に世界に恥を晒したのは韓国人である。日本に勝つて有頂天になった韓国人選手は、あろうことか神聖なマウンドに汚辱の象徴である太極旗を突き刺したのだ。これだけでも礼節を弁えない韓国人の愚かさは浮き彫りになるが、さらに驚くべきはファンのマナーの酷さである。「ドクトは韓国の領土」と書いた紙を掲げてスポーツの場面に政治を入れたり、ファウルフライを捕ろうとしたイチローの邪魔をしたり、民度の低さは目を覆うものがあつたが、その様な悪条件の中、日本は正々堂々と戦い世界一の栄冠を手にしたのだ。日本万歳！万歳！万歳！ 取材部/奈良忠雄 談